

C ボーダーとレイシズムを考えるために

【セッション報告】

世話人：梁英聖（東京外国語大学）

報告者：太田悠介（神戸市外国語大学）、北川真也（三重大学・非会員）、梁英聖

討論者：鶴飼哲（無所属）

参加者：20 名弱

近年欧米をはじめ世界各地でレイシズムが増大し、移民／難民排斥が叫ばれるなか、ボーダー（国境／入管）をめぐる闘争がアクティビズムにおいてもアカデミズムにおいても極めて重要な 이슈 となりつつある。とりわけ近年英語圏では、単に国家に対して移民／難民の在留資格やシティズンシップ公認を迫るのみならず、米国の監獄廃止論にも影響を受けながら、監獄産業複合体ならぬ（と同時に）複数国家にまたがる収容施設を含めたボーダー産業複合体の解体をも求めるボーダー廃止論の重要文献が相次いで刊行されている。実際のボーダー闘争のアクティビズムに支えられた活動家／研究者によって担われたそれら一連のテキストは、現代資本主義におけるボーダーとは何か、それとレイシズムやジェンダーやシティズンシップとの関係とは何であるかという根本的な問題を問うているといえよう。とはいえボーダーという概念はともすれば多義的かつ曖昧である。アイデンティフィケーションなのか国境か。そもそもボーダーとは何か。それらテキストにおけるボーダー批判に込められた実践的／理論的な意義とは何であるか。以上のような問題意識から、本セッション

ンは企画され、それぞれの専門テーマに基づいて各報告が行われた。

第一報告（梁）は、近年英語圏で台頭しつつあるボーダー批判論のうち、英国で2022年に刊行された Grace Mae Bradley と Luke de Noronha の *Against Borders* を取り上げた。まず同書を、同時期に刊行された注目すべき Harsha Walia の国境帝国主義批判 (*Undoing Border Imperialism* (2013), *Border and Rule* (2021)) と比較したうえで、両者にはグローバル資本主義における物理的国境の批判的分析と、移民／難民のシティズンシップ擁護にとどまる左派にたいする批判という共通の問題設定が確認できるとしたうえで、同書が Walia の著作と比べてもよりはっきりとボーダー廃絶論を訴えた、洗練されたマニフェストであるとし、4点にわたってその理論的意義を指摘した。第一に同書はボーダー＝国境が資本主義の下でレイス化かつジェンダー化されており、歴史的にグローバルな植民地主義において形成され、監獄やポリシングと一体となった国家の統治システムをなしていることを簡潔に整理してみせた。第二にボーダー＝国境問題に対しても廃絶主義的介入が必要であることを説得的に示した。第三に国境による統治が欧州や米国でデータベースやアルゴリズムなどのテクノロジーの次元でいかに行われているかを分析した。第四に米国の監獄廃絶論に学ぶ同書は国境廃絶運動にとってのユートピアの重要性を2つの間奏曲（短編小説となっている）で示した。以上を踏まえて梁は他の報告者、討論者、フロアに対して、冒頭に挙げた本セッションのテーマとなる問いのいくつかを投げかけた。

第二報告（北川）「包摂する境界という難問——メッザードラ＋ニールソン『方法としての境界』から考察する資本主義と人種主義」は、移民の闘争に触発されて精緻化されたメッザードラのボーダー論に着目し、特にブレット・ニールソンとの共著である *Border as*

Method, or, the Multiplication of Labor (2013) を取り上げた。特に報告では同書でのキー概念である「示差的包摂(differential inclusion)」の紹介および検討を行ったうえで、同概念とレイシズムとの関係にかんして若干の批判的コメントが行われた。メッザードラたちによると、たとえば「ヨーロッパ要塞」などのイメージにみられるように、ボーダーは往々にして排除するものとして考えられているが、それではボーダーを十分に分析できない。それゆえ同書ではボーダーを分析するために、フェミニズムや反レイシズム、移民研究などに系譜を有するという「示差的包摂」という概念を採用する。「示差的包摂」とは、包摂＝社会的善ではないことを踏まえたうえで、ボーダーは差異化や選別や「不法化」をも駆使する包摂する権力であり、空間のみならず国民国家の均質的な時間を再編する「時間的境界」でもある。そして以上の特徴は、ボーダーによる「示差的包摂」が、あくまでも移民＝労働者の自律的な移動を資本・国家が統制しようとした応答である。以上のようにメッザードラたちは、移民＝労働者の逃走＝闘争と、それを捕獲しようとする資本・国家の攻防としてボーダーを分析するのであるが、北川は、「包摂へのベクトルを強調するこの分析のなかで、人種主義の問題はやや背景に退いてはいないか？」(当日の報告レジュメ)と問いかけた。もちろんメッザードラたちはアシル・ムベンベの「死政治」分析を引用し、同書では「統治性の主権機」なる概念を用いることで、「示差的包摂」が同時に「死政治」の効果とセットであると指摘してはいる。しかしながら「示差的包摂の視座に立つと」「死へと接近する人種主義をめぐる現実や政治を軽視することになる」(同)のではないかと北川は問うた。

第三報告(太田)「フランスのスカーフとインターセクショナルな反人種主義——エティエンヌ・バリバルの境界論に寄せて」は、現代フランスの哲学者バリバルの「境界／国

境 (frontière)」論を考察した。『民主主義の境界』(1992) や『ヨーロッパ、憲法、境界』(2005) などでバリバールが分析する frontière には、物理的な「国境」に、国内集団のアイデンティティの「境界」という、2つの問題が重ねられ、特に後者に関してその多義性が重視されていた。報告では国内集団の分断という意味での「境界」に力点を置いたうえで、フランスのスカーフ問題とそれへのバリバールの応答を事例として取り上げた。1989年のパリ北郊クレイユで3名の女子生徒がスカーフ(ヒジャブ)を脱ぐことを拒否したとして公立中学校から自宅待機を命じられたクレイユでの事件を機に、スカーフがライシテに抵触するか否かが議論となった(「スカーフ論争」)。イスラムと性差別主義が一体だとするスカーフ反対派(共和派知識人ら)と反性差別主義は反人種主義の一部だとするスカーフ賛成派(ブルデュー)が対立するなか、バリバールはリベラシオン紙に「シンボルか真理か」を发表し、「反対派の意見を一部取り入れた賛成」「インターセクショナルな反人種主義: 反人種主義の延長線上で、反性差別主義の固有性を捉える」(当日報告レジュメ) 主張を行った。バリバールの立場は「スカーフが女性だけに関わるイシューであることを認めたいうえで、公立学校はスカーフを着用した女子生徒を受け入れるべき」(前掲) というものであった。同記事で「もし『イスラム教の』生徒が女子でなかったのなら、[...] 何も起こらなかっただろう！」(前掲) と述べたバリバールの議論には、スカーフ反対派 v s 賛成派が見落とした、「ムスリムであり、かつ女子生徒に固有の困難・複合差別(スカーフのインターセクショナルリティ)」(前掲) への着目が見られる。バリバールは以後も、フランスでのスカーフ論争について発言しているが、太田によるとそれら「バリバールのインターセクショナルな反人種主義とは、「イスラーム」に対してナショナルなライシテを強化するという現代のフランス

国家のあり方を批判しつつ、「イスラーム」と「西洋」の境界のはざまにある人々の生の実相（特にスカーフを纏う女性）に寄り添い、共生の条件を探る哲学的実践である」（前掲）。

討論者（鶴飼）は第一報告に対しては、いま世界にあるあらゆるボーダーにはその歴史があり、その非常に特異な歴史性を捨象しての一般理論ではあり得ないだろうと指摘した。例として朝鮮半島の 38 度線や、また今回突破されたパレスチナでのガザ／イスラエルのボーダーは、どのようなボーダーであり、今日議論されたようなボーダーとどんな関係があるのか、と問いかけた。また梁に対しては、米国の監獄廃止論などはアンジェラ・デイヴィスたちの歴史的経験が明らかに血肉化しているが、では朝鮮の民族解放闘争と離散経験の、たとえば『アリランの歌』の金山（キム・サン）の経験について、ボーダーの理論化がどのように貢献しうるのか、と問いかけた。第二報告に対しては、今回報告されたメッザードラらの議論で用いられる **Inclusion** について、「包摂」という語に、「包囲」という語を併置したうえで、日本国民もまたやはり解放などされておらず「包囲」されており、したがって国民と平等になることもまた解放ではない。ところでメッザードラらの移民についての理論化では、基本的に出生地主義の国籍法採用国でもいつまでも移民である、ということが問題にされているが、日本の場合は国籍法を出生地主義に変えることが極めて不可能に見えるなかで、この議論を活用するさいに何が必要になるか、と問いかけた。第三報告に対しては、まずクレイユ事件について補足として、当該教員がじつはアフロ系のフランス人であり、その人物が「よりフランス的な態度」を取ったということがこの出来事のもう一つの大きな特徴であったこと、さらにはリベラシオン紙に当時ドブレが「ライシテは我々の宗教である」と投稿したことも重要だとした。そのうえで、ヴェール事件以前、鶴飼が留学していた 1980 年代には、ジェルメヌ・ティヨンの『イトコたちの共和国』などの議論によって、ヴェールの問題を「イスラーム」と言うてはならない、南の文化と言わなければいけないということが一応、知識人、活動家文化の間では定着していた時期があったはずだが、それが失われていく時代があった。スカーフ論争で問題となっている女性は、植民地権力と伝統的家父長制に挟撃されており、まさしくスピヴァクの『サルタンは語るができるか』の基本的な構図、そのものである。しかしスカーフ問題が前景化してから、フランスのスカーフ着用女性は、ずっと語っているのであって、問題は誰がそれをどう聞き取るかということではないか、と指摘した。

フロアからは、ボーダーはたとえばアフリカからフランスへなどのように具体的に方向性を持っているはずだが、その方向性はどのように理論化されるのか、という質問が出された。関連してさらに、ボーダーそのものが多義的であるだけでなく、人によってもそれは多義的であるはずだが、この 2 重の多義性にかんして、とりわけレイシズムを問題とするならどのようなボーダーに焦点化して議論していくべきか、という質問が出された。さらに、第一報告で取り上げられた *Against Borders* ではボーダー廃止の主体として労働組合の位置づけが非常に高いようであるが、では日本での入管闘争でボーダー廃絶ないしは変革していく際の、労働組合の役割についてどう考えているのか、という質問がなされた。最後に、

社会思想史学会第 48 回大会セッション報告

Border as Method の議論でレイシズムについての位置づけが弱いのではないかとの第二報告での議論にかんして、米国のレイシャル・キャピタリズム論や監獄廃止論は確かにレイシズムと資本主義の不可分性を重視するものとはいえやはり歴史に根ざしたアメリカ例外的な資本主義認識で闘っているところもあるため、メッザードラらの議論とそれを対立させるよりは一緒に考えられないだろうかと問うたうえで、報告者がレイシャル・キャピタリズム論のような議論をどのように捉えているか、という質問が出された。

(文責：梁)